

ワシントン情報、裏 Version

2005年11月21日

竹中 正治

「現代における『魔法界』復活の意味:映画“Harry Potter, The Goblet of Fire”」



【ハリー・ポッターの封切り、満員御礼】

ハリー・ポッター第4巻“*The Goblet of Fire* (炎のゴブレット)”の映画版が18日に封切られた(日米同時封切り)。ポッター・シリーズのファンでもある私としては、当然初日に見たい。金曜日の仕事帰りによく行くジョージタウンの劇場は前売りチケットが既に売り切れだったので、チャイナタウン隣のシネコンに足を運んだ。再開発された地域の一角にある巨大なシネコンだ。場内は満席、開始時間直前に入ったら、スクリーン最前列と2列目の席しか空いていなかった。アメリカの映画館がこんなに混むのは、今年の他の例では“*Star Wars, Revenge of the Sith*”以外にはない。

ハリー・ポッター映画は、かなり原作に忠実に制作されている。原作が長いから、映画も長い。2時間30分、魔法世界の冒険を堪能できる。それでも原作の細部を相当省略せざるを得ないのは、映画の故にやむを得ない。映画の中でハリー、ロン、ハーマイオニーらも成長して、大人びて来た。第1巻“*Philosopher's Stone* (賢者の石)”の映画で印象的だった彼らの愛くるしさが抜けて来たが、映画の中でも4年の時間が経過しているのだから、これはリアリズムだろう。

映画のストーリーは原作の通りなので、ここでは繰り返さない。ポッター・シリーズの魅力についても、数多く語られているので、月並みなコメントを長々と繰り返す気はない。私は新しいポッター・シリーズを読む度に、宮崎駿のTVアニメ「未来少年コナン」を思い出す。大戦争で文明が崩壊してしまった未来を舞台にした「コナン」と、ユニークな魔法世界を舞台にした「ポッター」では想定は全く異なる。しかし、主人公とヒロイン、そして主人公の相棒を中心に、友愛と勇気を鼓舞するストーリー展開には共通するモチーフがある。また、「ポッター」にはストーリーを構成する道具立てとして、子供から大人まで楽しめる幅の広さがある。嫌ないじめっ子の尻に豚のシッポが生えたり、がみがみお婆さんが風船のように膨らんで空に飛んで行ってしまふシーンを子供は喜ぶ。魔法省のうんざりするような官僚組織体質や、無責任なメディア報道(日刊魔法新聞)などは、大人が接している現実への皮肉もたっぷり、ポッターやダンブルドア達との戦いに思わず引き込まれ、応援してしまう。

【ローマ教皇の「ポッター」批判】

興味深いのは、このポッター・シリーズに強い反発と警戒感を露にする人達がいることだ。今年の7月、ローマ・カトリック・ベネディクト教皇によるポッター・シリーズへの強い懸念を表す書簡が公開された。これはメディアでも報道され、話題になった。2つの書簡は、“Harry Potter-Good or Evil?”という著書でポッター・シリーズを批判したドイツのカプリエル・キュービーに宛てられたもので、教皇に就任する以前の2003年3月に書かれたものだ。教皇の許可を得て、公開されたそう¹。

書簡は短いもので、キュービーのポッター・シリーズへの批判を支持し、「ハリー・ポッター・シリーズは、子供達が成長する前に、魂の中のキリスト教精神(Christianity)を気づかぬうちに深く歪める微妙な誘惑としてはたらいっている」と述べた。中世ならば、ポッター・シリーズは禁断の書となり、読む者は異端審問で拷問され、火刑となったのは間違いない。

ポッターに関するバチカンの教皇の見解を巡る議論は今年始まったわけではない。実は2003年2月に当時のローマ教皇ポール2世がポッター・シリーズをどう思うかとの記者の質問に答えて、「もし私が著者の意図を正しく理解しているとすれば、それは子供たちが善悪の区別をできるようになることを助けることだろう」と述べた。欧米のメディアはバチカンの教皇がポッター・シリーズを是認したと、これを大きく報じた。彼ら、カトリックの一部は、これが気に入らない。バチカンの真意を歪めていると、この報道に強く反発した。彼らは反撃の機会を待っていたのだろう。現教皇が教皇に就任する前に書いたポッター批判の書簡を今年公開し、これがバチカンの教皇の本当の見解だと反撃したのだ。

【ポッター批判の論理】

こうした一部のカトリックは一体ポッター・シリーズの何が気に入らないのだろうか。私はキュービーのドイツ語の書を読むことはできないので、代わりに教皇のこの書簡を強く支持し、反ポッター・キャンペーンを行っているアメリカの代表的な人物、作家で画家のマイケル・オブライアン²の論説をウェブサイトを読んでみた。以下はその要約である²。

「世の中はポッター・シリーズを若い世代の読み物として賞賛する声に満ちている。彼らは、その質の高いドラマ性、想像力に富んだストーリー、ユーモア、『徳(Value)』の賞揚などを讃えて来た。しかしこれが魔術と魔法使いを基本的な要素にした物語であることには、ほとんど注意が払われていない。魔術や魔法使いが、普通(normal)のものであるかのごとく、時には救済(saving way)であるかのように描かれているのである。こうしたことを問題にする者は、『ヒステリックな警戒主義者』、『(キリスト教)原理主義者』よばわりされて来た。正統的なキリスト教者の間でも意見は別れ、ポッター・シリーズ批判家を責める意見も多い。しかし彼らは、人間の意識に与える文化的な産物の影響力が判っていない。

ローマ教会の公式悪霊払い祈祷師であるガブリエル・アモス氏はこう言っている。『ポッター・シリーズの背後には、暗黒の王、デビルの姿がある。ポッターで語られる多くの要素は闇の王国に起源するものであり、魔法、サタンの技に関する肯定的な言説に満ちている。さらに魔法には良い魔法と悪い魔法(white and black magic)があるという誤った認識を与えようとしている。実際にはそのような区別はあり得ない。魔法は常にデビルに由来するものである。』

¹ <http://www.lifesite.net/ldn/2005/jul/05071301.html>

² http://studiobrien.com/site/index.php?option=com_content&task=view&id=121&Itemid=45

ポッター批判を表明したベネディクト教皇は、道徳的相対主義の独裁 (dictatorship of moral relativism) に対する抵抗の必要を呼びかけた。それは大規模な精神的な戦いとして、西洋文明における新しい次元の運動に発展するであろう。我々のかつてキリスト教文明だったものは、今日急速に世界的な異教徒的状况 (universal condition of paganism) にすべり落ちつつある。現代における paganism は過去のそれと異なる際立った特徴がある。それはキリスト教の諸価値規範をより大きな普遍的な枠組みの中へ同化しようとしている。その本質はグノーシス主義的 (Gnostic) である。」

この後、現代に再浮上したグノーシス主義への批判が延々と続くのだが、神学的論争に興味のない読者には、ここまでで十分であろう。要するに、ポッター・シリーズは良く出来た小説であるが、表向きの勇気や友愛を鼓舞するベールの背後に、反キリスト教的な魔術・魔法使いを普通のものとして受け入れさせる巧妙な仕掛けに満ちているというのだ。

【魔法界の世俗化 ⇔ キリスト教社会の世俗化】

勿論、こうした議論は、非キリスト教徒 (pagan) の私達には全く説得力を持たない。妖精や魔法使いの登場する物語は昔から数限りないし、超能力や超科学技術の登場するSF映画だって、そうした空想的な要素を物語の道具立てとして子供の頃から私達は楽しんで来ただけだ。従って、反ポッター論者を「ばかじゃないの」と一笑にふして終わらせることもできる。実際、クリスチャンでもポッター・シリーズを受け入れている人の方が多い。しかしアマゾンで“Harry Potter” “Christian” の2つをキーワードにして検索してみたい。肯定するか否定するかはともかく、ポッター・シリーズをキリスト教徒はどのように受け止めるべきかを語った本が続々と出ている。彼らにとっては真面目な問題なのだ。

魔術は反キリスト教的であり、全てサタンに由来しており、従ってポッター・シリーズはキリスト教の精神にとって害悪をもたらすという考え方は、いかにも教条的、機械的な判断だと笑うこともできる。しかしおそらくこれは彼らがポッターを強く警戒する本当の理由ではない。彼らは何が気に入らないのだろうか？ 実はポッター・シリーズがもたらす文化的な効果を、彼らはある意味では鋭く感知しているのだ。それはキリスト教社会の世俗化である。

古代から中世にかけて、ローマ教会が権力を確立する過程で、教会が利用できる非キリスト教的な文化的要素は「キリスト教起源」のものとして塗り替えられて、取り込まれた。例えば 12 月 25 日をキリスト誕生のクリスマスとして祝う慣行も非キリスト教的由来によるものである³。同時に、取り込まれなかった一切の風習、知識、技は反キリスト教的、悪魔的、魔術的なものとして抑圧、排除された。

ポッター・シリーズではキリスト教的な文化的要素はほとんど登場しない。教会も、十字架も、神への祈りも登場しない。マグル (非魔法界の人間) の世界と魔術・魔法使いの世界で全てが構成され、魔法界は完結した世俗社会を構成している。魔法界は教育システム (ホグワーツ魔法学校)、政府組織 (魔法省)、メディア (日刊魔法新聞) など全ての世俗的な要素を備え、子供たちは人文、社会科学を習うのと同じように魔法体系を学校で学ぶ。人々がサッカーの試合に興じるのと同じように、魔法使い達はほうきで空を飛びながら行う団体戦、クィディッチ競技に興じる。

ポッター・シリーズで描かれているこうした魔法界の世俗化は、クリスチャンがその対極におくキリスト教的な価値規範自体の世俗化につながるのだ。虚構としての魔法界の世俗化は、現実のキリスト教

³ キリストの生誕の時については諸説あるが、12 月 25 日あるいはその前後ではなかったことは、歴史家の間でコンセンサスのようだ。12 月 25 日はミトラ教の冬至の祭で、それがキリスト教に取り込まれたとも言われている。

社会の世俗化傾向の反映として産み出され、同時に現実社会の世俗化を推進する文化的な効果を発揮する。

日本のアニメ「魔女の宅急便」や「おジャ魔女どれみ」もこうした文化的トレンドの産物である。旧くは「奥さまは魔女」、「魔法使いサリー」も同様であろうか。友愛や正義の価値観はキリスト教なしでも当然成り立つ。「魔法界」においても成り立つ。ポッターを批判するハードコアなキリストチャンにとっては、それは **paganism** であり、文化的な相対主義として受け入れがたいのである。反対に、非キリストチャンの私達にとっては、文化的な相対主義は福音である。キリスト教の価値規範を至上とした絶対主義社会など想像するだけでぞっとする。

【現代の福音】

10月末日のハロウィーンは古来ケルト人(ガリア人)の収穫感謝祭がキリスト教に取り込まれたものだという。ケルト人にとってこの日は1年の終わりであり、死者の霊が家族を訪ね、精霊や魔女が徘徊する日だった。日本の「お彼岸」に相当する。これがキリスト教に取り込まれ「諸聖人の日(万聖節)」となったようだ。ところが、このハロウィーン、現代のアメリカでは宗教色は消え、子供達の大好きなイベントと化している。「おかしをくれないと、いたずらするぞ〜(Treat or trick)」と言って近所の家々を回る子供たちは様々な仮装をする。女の子達に一番人気なのは、魔女のコスチュームだ。その他には、各種バンパイア、ゾンビ、海賊、王様、女王様、忍者などが人気だ。また子供達を「迎えうつ」家々も、お化けカボチャのジャックランタンをはじめ、ドクロ、がい骨、クモの巣などでデコレーションし、様々な非キリスト教的な様相に満ちている。まるでキリスト教によって魔術的として放逐された古来の風俗が、形を変えて今日に甦ったような様である。

現代のジーザス・ランドであるアメリカはキリスト教の伝統的な価値観が世界のどこよりも強く残っている。それでもハリー・ポッターがヒットし、ハロウィーンと感謝祭やクリスマスが同時に存在する。現代のアメリカは異なった文化的要素がせめぎ合っている点において、世界の他の文化圏と同様である。

文化的に異質な諸要素は相互に取り込み、取り込まれ、伝統は変異し、古い文化的要素も形を変えて甦る。ポッター・シリーズは、反キリスト教として闇の領域に放逐されていた「魔法界」を、現代社会の様々な文化的要素を取り込んで世俗化することで、闇の世界から救出し、新しい命を吹き込んだと言えるだろう。それは同時に宗教至上主義的な価値観を相対化し、信仰に拠らない友愛と勇気が可能であることを語る現代の福音でもあるのだ。



以上